

## エスペラント朗詠短歌通信添削 (2)

前田茂樹

### エスペラント朗詠短歌募集要項

- 1、一人二首まで
- 2、匿名可
- 3、テーマ自由
- 4、あて先 ノーバ・ボーヨ編集部  
〒 621-8686 京都府亀岡市天恩郷大本本部内  
FAX 0771-25-0061 e-mail officejo@epa.jp
- 5、作品は添削後誌上で発表

先月号でエスペラント朗詠短歌の作品募集を行いました。以下の応募がありましたので発表させていただきます。

### 作品 (A)

Jen cikado ja  
soifĉirpanta amon  
ja silenta sur  
la tero en mateno  
kiam gimnastikas ni.

<解説> エスペラント朗詠短歌の特徴は、古来、我国に伝わる雑ぶりの調子で朗詠できるということです。そのためには強弱の拍子(エスペラントで言う強弱のリズム)に詩句を対応させることが最も大切な条件となります。シラブルの数が一つ多くても一つ少なくても、強弱のリズムが一つ狂っても朗詠に支障をきたします。この作品(A)の作者は、そのことをしっかり理解して創作しています。その上で、文法または表現上で修正する必要がある点を見つけ、よりよい作品に洗練する努力をしてみたいと思います。

まず、この詩には大切な部分に komo が欠けているため、全体

的に少しメリハリに欠けた歌になっています。これを解消するためには、一行目の ja の前、二行目の amon の後、そして四行目の la tero の後に komo を打つ必要があります。分かりやすくするために詩句の配置を変えてみます。

Jen cikado,  
ja soifĉirpanta amon,  
ja silenta sur la tero,  
en mateno  
kiam gimnastikas ni.

こうすると、木の上で鳴いている蝉、地上に転がっている蝉、二つの蝉に関する表現が明確になります。ただ、朗詠短歌ではこういう表記はしないため、課題として残るのは、一行目の最後にある ja と、三行目の最後にある前置詞 sur のあり方です。三十一文字を横に一行に並べて表記する場合は問題ありませんが、両語とも後続の語と深い関係にあるため、五七五七七と五段に並べて表記する場合、この配置には少なからず違和感があります。それに、エスペラント歌祭の献詠歌集には、朗詠の対象となる秀作は五七五七七の五段で表記されるため、あまり印象がよくありません。また、三行目の最後には弓太鼓をトントンと二つ入れることを前提にしていますので、ここに前置詞だけが置かれていると前置句を構成している次の語（ここでは la tero）まで間が空きすぎてしまいます。

この歌の舞台は朝の公園と伺っておりますので、公園という語を入れる努力をしてみましょう。Kiam を dum に変えて次のような表現を変えてみます。

Jen cikado, ja  
soifĉirpanta amon,  
ja silenta sur  
la tero, dum matene  
parke gimnastikas ni.

エスペラント朗詠短歌は創作時に少なからず壁にぶち当たります。この壁を乗り越えることによって、よい作品を生み出すことができるのです。そのためには、妥協をしないことが大切です。何度も辞書を引き、よい形を見つけるまで粘り強く創作に従事してください。以下は参考例です。

Ĉirpas ja cikad' ,  
sopire je l' partnero,  
kaj eĉ trovas ni  
la sternajn, dum matene  
parke gimnastikas ni.

### 作品 (B)

Longavice ni  
suriras la monteton,  
antaŭ jarcent' jen  
lasataj paŝoj tie,  
ni postiru Majstro nun!

<解説> 作品 (A) の作者と同じように、この作品の作者も拍子 (リズム) の大切さをよく理解して創作されています。ただ、全体的に見ると、三行目以降の内容が少々分かりにくくなっていますので、この辺の詩句の修正を重点的に考えていきましょう。

まず、三行目以下の表現が分かりにくくなっているのは、詩句の配置に問題があるからです。二行目に suriri という動詞がありますから、五行目の postiri を省き、三行目に laŭ la piedspur' と続けます。そうすると、「誰の歩いた後」なのかを説明する必要性が出てきますから、de Majstro とはつきり限定してやります。それが行われたのが 100 年前、つまり、postlasita / tie antaŭ la jarcent'。五行目の ni postiru Majstro nun! という語句ですが、「Majstro の後につづく」という意味なら Majstron か al Majstro としなければなりません。

Longavice ni  
suriras la monteton  
laŭ la piedspur'  
de Majstro, postlasita  
de li antaŭ la jarcent' .

それから全体的に見て、もう少し場所に関する情報があつたほうがよいと思われます。作者の説明では、走水神社がテーマになっているということなので、関連する固有名の挿入を工夫してみましょう。ちなみに、日本語の固有名をそのまま使う場合、アクセントの位置はエスペラントの規則に従いません。朗詠短歌の強弱の拍子に従うのみです。したがって、Haŝirimizu という語を挿入する場合、下記の例のように、三行目に置くことができます。

Jen suriras ni  
altaĵon de l' jaŝiro  
Haŝirimizu  
viciĝe laŭ la spuro  
Majstra antaŭ la jarcent' .

これはあくまでも試作です。参考にしてください。

さて、第1回目の朗詠短歌の添削をさせていただきました。はじめのこととて至らない点が多々あつたかと思ひます。どうぞお許してください。もう少し違つたやりかたがあるのではないかと、試行錯誤の連続でした。いずれにしてもこのコーナーが続いてゆく過程でふさわしい形ができてゆくように思ひます。とりわけ、この第1回目の誌上歌会に応募くださいました皆様心から感謝申し上げます。今後とも焦らず無理をすることなく創作活動をつづけていただきたいと思ひます。そして、来月号には一人でも多くの方の応募がありますことを期待しております。